

---

# おっさんボックス

ともさんず<sup>§</sup>

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おっさんボックス

### 【Zマーク】

Z1066M

### 【作者名】

ともさんず

### 【あらすじ】

大学生の一樹とおっさんのシユールな出来事。

平凡な一樹の日常にある日おっさんが襲いかかる。

おっちゃんの荒い鼻息が顔にかかり、一樹は顔をしかめる。

通学の満員電車でおっちゃんと密着する「」には慣れている。だが、バーコード頭で脂汗をたらし、歯を食いしばり震える拳を固めながら無言で瞬き一つせずにちらりと睨んでくるブリーフ「丁」のおっさんと密着する「」と、「」一樹は慣れていなかつた。

「あのすみません。」一樹は再度おっちゃんと「」ニケーションをじる」と試みてみた。

「本當」「」から出してもらえないですかね。」

おっちゃんは依然無言で歯を食いしばりながら「」を睨む。「」ニケーションは失敗した。

この「」時世、一樹のような田舎の三流大学生を採用してくれる企業とこののはやうやう多いものではなく、それだけに今日の面接は本氣で臨みたいと思つていた。

数々の企業の採用試験を受け、「こと」「ダメ」だった一樹にとって社長面接まで進んだ今日の会社は最後の望みだつた。

その辺のところがやつぱりフレッシュヤーだったのだろう。駅に向かう道の途中で急激におなかが痛くなり、内股になりながらへこへこと公園のトイレに駆け込む。

何とか緊急事態は回避できたものの、乗るはずだった電車はすでに

逃してしまった。次に来る電車は20分後。田舎の電車の本数の少なさは半端ない。

とうあえず会社に電話しなきゃと携帯を出す。が、電池がもうわざかしかない。多分電話かけたらすぐに電池切れる。

そういうや昨日充電してないや、おれのアホ。

どうしようかと思ったが、とうあえずすばやく携帯のアドレス帳を開き、会社の電話番号を紙にメモる。そして、公園の傍らにあった電話ボックスに駆け込む。

そつから何かがおかしくなった。

10円玉を取り出し、電話機に入れようとしたその時、背後からただだと走る音が聞こえ、振り向いた瞬間一樹のいる電話ボックスに汗だくでブリーフ一丁のおっさんが飛び込んできた。

「え？えええ？あえ？」

人はびっくりすると、ちゃんとしたことが言えなくなる。

電話ボックスに飛び込んできたおっさんは一樹の5㍍手前で立ち止まり、ふがふが鼻息を出しながら一樹の前でとまる。

あまりにもシユールな出来事に一樹はしばらくの間あいつについていたが、とりあえず何とかしなければならないことに気づく。まずはおっさんとのロミロミケーションを試みることにした。

「あ、あの、電話、先に使いますか？」なんか論点がずれてる気が

するが、とりあえずおっさんはなんかしゃべって欲しい。できる限りのことをするからこのワケの分からぬ状況から解放されたい。

おっさんは無言で歯を食いしばりながら、一樹を睨みつける。せめて、なんかしゃべってください。

1分なのか、10分なのか、1時間は経っているのか、耐えがたい無言の状況が続く。この状況に何をしていいのか分からるのは一樹がゆとり世代だからとかそういう問題ではないはずだ。

この沈黙に耐えきれなくなつた一樹は再度動き出す。

「すみません！」と言いながらおっさんの脇をすり抜け電話ボックスから出ようとすると、会社に電話をしなければならないが、まずはこの状況から抜け出したかった。

だが、その瞬間おっさんは腰を低く落とし一樹にがっぷりと組みつき、相撲の要領で一樹を再び電話ボックスの奥まで押し込む。このおっさんが何をしたいのかが全然分からないが、力では勝てないことは分かつてしまつた。

一樹が改めてうんざりした顔になつた時、おっさんがゆっくりと口を開く。

そして

ゆっくりと口を開じる。

何か言えや。

そんなこんなでもう數十分が経過した。その間、一樹は色々と試みていた。

再度コミュニケーションを試みてみたり、食べ物で釣つてみたり、人生相談をしてみたり、バイトでの恋愛の話を面白おかしくしてみたり、おっさんの頭をペチャペチしてみたり、鳥羽一郎のもまねをしてみたり。

だが、おっさんは依然無言で血走った目で一樹を睨みつける。

一樹がおっさんのまつ毛を引っ張つてみている時、おっさんが不意に動き出す。

おっさんは無言でブリーフの中に手を突っ込み、何かを取り出そうとしている。

おい、やめろ！…それはいかんよ…！

それはいかんよーーー！

だが、出てきたのは携帯電話だった。一樹がほつとしたのは単におっさんがアレを取り出そうとしたわけではなかったからだけではなく、このおっさんが文明の利器をを扱うことの出来る生命体だということが分かつたからだ。

携帯を使いこなすことのできる現代人なら、我々ともコンタクトが取れるに違いない。

おっさんはポチポチと携帯のボタンを押す。携帯を両手で扱うのがいかにもおっさんだが許す。大丈夫だよー。

密閉された空間は些細な音も響く。おっさんの携帯から漏れる呼び

出し音が一樹にも聞こえる。

電話に出たのは意外にも若い女性の声だった。

「はーい、もしもー」  
ガシャン！

おっさんは力任せに携帯をコンクリの床に叩きつける。飛び散った  
破片が一樹の足に虚しくべそりと当たる。

あー、もう駄目だ。一樹はその場にへたり込む。

もー、何なんだよー、俺はただ就職がしたいだけなのに何でこんな  
田舎うんだよー。

総理は口口口口変わるし、政治が悪いのにゆとり世代とか言われる  
し、悪いのは不景気なのに車離れを若者のせいにされると、田の前  
にはブリーフがいるし。

何なんだよこいつ、と一樹はへたり込みながらおっさんの脛を軽く  
じつさとける。

じつせ依然無言で血走った田で睨むだけなんだろ?って思つてたが、  
意外にもおっさんは変化した。

「うお——————」

「むんぐお——————ん————」

突如の咆哮で一樹は再度固まる。

電話ボックスのガラスはびりびりと震え、ライブ会場でよくあるお  
腹にずんずん来る重低音に襲われる。

ぎやー、怖い怖い怖い、「めんなわこ」「めんなわこ」「めんなわこ」。

おっちゃんの包囲は止まりや、一樹は恐怖でへたつこんだ体をそりこそりこ小ちく丸める。

ふるふるふるふる

ふるふるふるふる

重低音の咆哮に交じり、高音の電子音が聞こえる。  
電話の呼び出し音だが、一樹の電話はマナーモードだしあらんの  
携帯は「元」携帯になつて床のあちこちにある。

あれ？ びりかひりこむのせいの電話ボックスの電話ひりじい。な  
んで？

恐怖と混乱で一樹の頭は訳が分からなくなつてゐる。なぜか昨日食  
べたチャーシュー麺の事とか思いだしてゐる。

不意におっちゃんが電話に出た、とこづか初めて喋つた。

「つむ、つむつむ、問題はなさうだ、その方向で進めてくれ」  
意外すぎるほどビジネスメンな口調でおっちゃんは淡々と話す。

おっちゃんはガチャンと電話器を置き、粗末わらす血走った手で一樹  
を見下ろす。

そして落ち着いた、それでいて威厳のある口調で一樹に声をかける。  
「じօօtatiօtatiօn！」

なんだそりや。

そのままおっさんは一樹に背を向け電話ボックスを出て、ダッシュで去つて行つた。

一樹は放心してその場を動けない。

一樹がやつと正気を取り戻した頃、すでに面接開始の時間から一時間が経過していた。

ああ、そうだ、会社に電話しなくちゃ。

何で言ふにしらむ。被質者に襲われたので面接避けます。すみません。

何を言えば良いか頭がまとまらないまま電話をかける。あの、すみません、本日面接を予定していた伊藤一樹ですが変質者に襲われてしまつてもによもにょ。

俺が言つてることも良く分からぬだらうが、採用担当者はもうと分からぬことを言つてきた。

「社長から話は聞きましたが、伊藤一樹さん、本日の面接の結果、採用になります。」

ん? どうこう? ひとつ面接した?

え？ もしかしてさつきのあれが？

明日、辞めますって言つやう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1066m/>

---

おっさんボックス

2010年10月21日15時20分発行